



# 戦国時代の九十九島の様子

九十九島とは俵ヶ浦半島から北へ鹿町町あたりまでの海域に点在する島々のことで島の密度は日本一といわれている。

九十九(くじゅうく)とは数がたくさんあるという意味で使われる例え言葉で、実際の島の数は**208**ある。

また昭和30年に日本で18番目の**国立公園**の一部として指定されている。

現在ではその美しい景観を展望台からみて、人々を魅了している九十九島だが、当時は海上交通が盛んで、九十九島の複雑な地形は様々な使われ方をしていたようである。当時と今の景観はほとんど変わっていないと思われる、佐世保湾には埋め立てなどによってなくなった島もいくつかあるが私達が今見ている景色は太古より変わらぬ姿だと思われる。

九十九島に関する伝説を見てもと**海賊**に関わる伝説が多く残されている。戦国時代以前この付近には**松浦党**と言う武士集団がいた。その一部に強奪行為をし海賊として恐れられ**和寇**などと呼ばれていたものもいたという。そこから数々の伝説が生まれたのだろう。実際、一部の松浦党の人々は陸地より目立たない九十九島を基地にして遠く大陸まで海賊行為を行っていたと伝えられている。

九十九島はひとつひとつの島に言い伝えや伝説が残っていておもしろいが、なかでも中世に関わる言い伝えがこの島々を3つご紹介する。

## 松浦島

その名の通り平戸藩松浦家の所有地で鷹狩りなどに使われており、松浦家兵船のつなぎ場所でもあった。

島では上質の土が採れ、瓦を焼くために使われていたという。

また平戸藩の罪人の島流し場所として使われていたという話もあるが本土との距離が短く十分に泳げる距離なので可能性は低い。



## 牧の島

松浦藩時代に、放牧場であったのが由来と言われている。

<伝説>

●牧の島の東側にある小さな入り江は昔、海賊船の集合地であった。ある時、地元の者がここに潜んでいた一隻の海賊船を捕らえ、金銀宝玉を奪ったうえに海賊達に石の重りをつけて海中に投げこんだ。その時海賊の一人が沈みながらも海面に顔を出し、「この恨み七代の後までたたってやる」と言いつつ沈んでいった。その後、呪いの言葉どおり、海賊を襲った者の家系には必ず体の不自由な子が生まれた。

一説では、この伝説における人物は「地元の者」「海賊」ではなく源平合戦の折、平家に加担していた松浦水軍がおちのびてきた時、源氏に寝返った者が、財宝の警護をしていた平家の武士を襲ったとも言われている。

●夜間にこの付近の海上を通ると必ず舟幽霊につけられて遭難した。このため船頭たちはここを『魔の浦』と呼んで恐れた。

## 金重島

<伝説>

●源平の戦いに敗れ金銀宝玉をたずさえて落ちのびてきた平家の武士が、夜陰にまぎれ小舟でしばしばこの島に渡るのを、里人のひとりが見かけていた。これを聞いた松浦党がその探索をしたが、ついに発見できなかったと言う。

●戦後、佐世保在住のある人が色々な文献による調査の結果、まちががなく平家の財宝が隠されていると信じ、私財を投じて人を雇い発掘を試みたが、夢半ばにして亡くなり、ついに発見できなかったという。

●天正14年(1586)、松浦家の武将・佐々入道加雲は、大村家の宿将・大村与市の守る彼杵城を攻めたが城は容易に落ちず、かえって大村勢の反撃にあい敗れた。加雲は部下数名と共に船で平戸にのりかえようとしたが追手に迫られ、金重島に隠れた。しかし敵の探索にあつて発見されてしまい、加雲はついに大岩の上で自刃した。島の南側にあるこの大岩は、加雲岩と呼ばれている。



# その他こぼればなし

## 伊能忠敬と九十九島

1813年頃の九十九島



現在の九十九島



伊能忠敬は1812年12月8日に平戸藩領南端の針尾島に入り、相浦で年を越し新年1813年九十九島の周辺の複雑な地形を測量している。そのご北上し平戸城下に入り平戸島を測量し最後に対馬に渡海したのが3月26日だった平戸藩領内の測量は3ヶ月以上かかり他藩と比べて長期に渡っている。

もともと長崎県は日本一島の多い県であり、海岸線の長さも日本一と言われています。長崎県の海岸線を一本のヒモにしてそれを延ばした場合、長崎から北海道で行き折り返して東京あたりまでくるからの長さだという。これは複雑な海岸線と離島の多い長崎だからこそであり、佐世保測量の伊能忠敬は68歳。なかなか大変な測量だったのだろう。

## 幕末の九十九島

坂本龍馬に多影響を与えた幕臣・勝海舟。彼も長崎とは非常に縁が深い人物です。安政2年(1855年)より4年間、勝は長崎にある幕府の海軍士官養成機関・長崎海軍伝習所の伝習生として、航海術を学んでいました。

その時の教官であったオランダ人将校カッティンディーケの回想記「長崎伝習所の日々」によると、勝らを乗せた練習船・咸臨丸は現在の長崎県北の平戸島から佐世保へと広がる九十九島を4回ほど通過したようです。

回想記の中でカッティンディーケは、「この海峡はまったく絵のように美しい」と語っています。